

美術専攻 版画研究領域

オウ カン

王 涵



Almost Human

リトグラフ、転写、機械装置、木、革

Almost Human

私は「版」を、万物の実存と本質を連結するメタファーとしての「皮膚」と捉え、転写や印刷の工程を通して画材の物質的な存在感をいったん後退させ、図像だけが残る表面を作品「肉体」を覆う皮膚として立ち上げたい。皮膚は境界線でありながら、開放や融合の兆しでもあり、領域を保つと同時にそれを破り、いつでも開かれ、剥がれ、溶けうる膜として、生成の始まりと未来への媒介を担う。万物は皮膚を持つことで独立し、皮膚を破ることで生成の流れの一瞬となる。

私は、手漉き紙、板材、リトグラフ、そして転写によって、認識しきれない生物の形態を作り出し、人間と自然の境界が固定されたものではなく、形態や素材のあり方によって常に揺れ動く瞬間を扱う。身体は「人」として完結せず、動物の輪郭や群れの視線に侵入される一方で、動物の身体はネジや配線、回転軸といった構造を露出することで自然物ではなく人工物として立ち上がり、その相互侵入のなかで自然／人工、人／非人間の区分は、表面に刻まれる痕跡として具体化される。擦れ、汚れ、しみ、欠け、貼り直しといった表面の痕跡は、自然／人工の往復記録であり、私はこの往復を皮膚の働きとして捉える。皮膚は閉じるためだけの膜ではなく分泌し、外部を通し、境界を更新し続ける。

本作では、この境界問題をポストヒューマンへ向かう入口として位置づけ、身体が他者の視線や規範に触れたときに生じる緊張や輪郭の崩れを、非人間との接触へと接続する。人間中心の尺度を一段下げた場所で、自然と人、身体と装置が同じ面でせめぎ合う場を提示し、その関係がいかにかに成立し、いかにかに崩れうるのかを可視化したい。こうして現れる皮膚は単なる外面の仮象ではなく、内側の力や記憶を外へ滲ませる場であり、二項対立を溶かし、複数の存在が一つの連続体として知覚される条件を探る。